聖霊降臨後第５主日　（特定８）　　2010/6/27

聖ルカ福音書第９章５１節ー６２節
　於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

　ルカ福音書を大きく分けると、前半はイエスさまの誕生物語から始まって、ガリラヤでの宣教の働きを描いています。そして後半は、イエスさまとその一行がガリラヤからエルサレムに向かう旅と、エルサレムに到着してから、そこでのイエスさまの働きと受難・復活・昇天を描いている部分と言うことになります。
　今日の９章５１節から、その後半が始まります。イエスさまはガリラヤでの活動を終えて、エルサレムに向かう旅を始めます。大変長い旅路です。この旅の間に、イエスさまは多くの教えやたとえ話を弟子たちや群衆に向かって語っています。また４つの奇跡を行っています。この部分はルカ福音書だけにしか見ることのできない独自の記事で、他の福音書にはないものが沢山採り入れられています。また、ルカとマタイ両福音書にだけ共通する教えも多くが採用されています。イエスさまとその一行がエルサレムに向かって上っていく旅は、ルカ福音書の大きな特色だと言うことができます。
　旅の初めに当たって、ルカはこの旅がどのような旅であるかを書いています。それはイエスさまが、天に上げられる旅です。十字架の上に上げられるだけではなくて、受難と死、そして復活を通して天へ上げられることが、神さまの定められたご計画です。エルサレムでイエスさまを待ち受けているのは、このような神さまの定めです。
　イエスさまは、その日が近づいたことを覚って、それに向かって進んで行く決意を固められます。「決意をする」という言葉の元々の意味は、「顔を固める」ということです。顔をしっかりとエルサレムに向けて、そこでご自分に起ころうとしていることを見つめて、目を逸らすことのないように、顔の向く先を固定するのです。そうして神さまのご計画の実現のために、従う決意を固められたのです。
　イザヤの預言の中に登場する「主の僕」も、「顔を固い石のように」しました。聖書協会の口語訳では、「顔を火打ち石のようにした」と訳されています（50：7）。火打ち石というのは、固い石なのでしょう。そのように決意を固めて、自ら進んで苦しみを受けようとしたのです。それが神さまの意志であると確信したからです。イエスさまの決意は、イザヤの「主の僕」の姿と重なります。
　エルサレムに上る道は、人々の拒絶に遭う道です。この旅の初めに、サマリアの人々から歓迎されなかったことは、この先、イエスさまに起こることを暗示しています。
　ユダヤ人とサマリア人は、もともと敵対関係にありました。その原因ですが、紀元前７２２年に北イスラエル王国がアッシリアによって滅ぼされ、上層階級は捕囚となって連れ去られました。その後に、余所から他の諸民族が

移されてきて、残されたサマリアの人々との間に混血が起こって、純粋なユダヤ人とは認められなくなりました。宗教的にも、異教の神々が持ち込まれて、ヤーウェと共に礼拝されるようになりました（列王記下 17：24ー41）。そのためにユダヤ人は、人種的にも宗教的にも異なった人々や宗教と混ざり合ったサマリア人を、バカにするようになりました。

この他にも　ユダヤ人とサマリヤ人との間には、いくつかの紛争が起こりました。そして決定的な対立は、紀元前４世紀に、サマリア人がゲリジム山に神殿を建築し、神さまを礼拝する場所はそこ以外にはないと主張して、エルサレムを中心とするユダヤ教を認めないことによっています。

イエスさまもユダヤ人から､「あなたはサマリア人で悪霊に取りつかれている」（ヨハネ８：48）と中傷されていますが、サマリア人、イコール悪霊に取りつかれた者という、ユダヤ人の激しい憎悪と軽蔑の感情が言い表されています。

そのサマリア人から、イエスさまの一行は拒絶されたものですから、「雷の子（ボアネルゲ）」とイエスさまに渾名をつけられたヤコブとヨハネが、「天から火を降らせて、サマリア人を焼き滅ぼしましょうか」と言ったというのは、２人の民族感情が刺激されて、そこに火をつけられたためでしょう。

サマリア人を焼き滅ぼしましょうかと言ったヤコブとヨハネを、イエスさまは振り返って叱りつけました。これは悪霊を叱る時と同じ言葉です。「きびしくとがめられた」（詳訳聖書）のです。その理由をわざわざ説明する言葉を加えている写本があるということです(現代聖書注解『ルカによる福音書』)。それによると､「あなたがたは自分がどんな霊に属しているのか知らないのです。人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすために来たのではなく、救うために来たのですから」と言って、イエスさまは裁くためではなくて、愛の道を歩むために来られたと注釈を入れているのです。

ヤコブとヨハネは、昔、エリヤが自分を捕まえに来た王さまの部下たちを天からの火で焼き殺した故事を知っていたのでしょう（列王記下 1：10ー）。エリヤと同じような力をイエスさまに期待したのです。しかし、イエスさまがエルサレムに向かって進む道は、神さまのみ心の実現のためです。神さまのみ心は、力によって人間を屈服させて従わせることではありません。力を用いたらどうだ、というのは荒野での悪魔の誘惑です。２人の弟子は、神さまの道がどのようなものであるか、ここではまだ理解をしていません。愛するということがどんなに厳しいことであるのか、イエスさまの固い決意を感じ取ってはおりません。

イエスさまの進んでいく道に､弟子を志願する３人の人たちが登場します。この３人に対するイエスさまの言葉は､ビックリするようなものばかりです。こんな要求をされるのであれば、早いところイエスさまに見切りをつけて、宗旨替えをした方が自分には合っていると思う方が、或いはあるかも知れません。イエスさまについていったら、安住の場所を得ることが出来ない。実際、サマリア人に断られたばかりです。イエスさまについていくということは、人々から受け入れられることを拒否される、そのようなことが起こるの

です。
　ユダヤ人とサマリア人の民族的対立が、イエスさまが拒絶された原因であると、先程言いました。しかし、ルカは、イエスさまの顔がエルサレムを向いていたからだと、その理由を書いています。神さまの道を歩き、神さまのみ心に従おうとするイエスさまを拒否したのです。神さまの愛に生きようとして、冷たくあしらわれたのです。そのようなことが起こるのです。その覚悟が、弟子になろうとするものには問われるのです。
　３人の弟子志願者のうち、後の２人は、１人は、ついていく前に父親を葬らせて下さいと言い、もう１人は暇乞いをさせて下さいと頼みました。しかし、イエスさまはそれらを認めませんでした。イエスさまに従うことが、何事よりも最優先されねばならないことを示されました。
　イエスさまに従うことは、わたしたちが毎日の生活の中で、神さまの厳しい愛に触れることです。そしてイエスさまの歩んだ同じ道を、わたしたちもその後から歩んでいくことであると思います。
　さて、20 世紀前半に活躍したインド人の托鉢伝道者でスンダル・シングという人がいました。戦前、日本にも伝道に来たことがあるようです。その人が次のような話を残しています。
　ある教会に、大変真面目な牧師がいました。日曜日になると一生懸命説教して、信者を指導してきました。やがてその牧師が死にます。すると天の御使いがきて、その魂をパラダイスに連れていきました。パラダイスは７つの層に分かれていて、牧師の魂は一番下の層に連れて行かれました。
　間もなく、その教会の信者の一人が死にました。すると、また天の使いがきてその魂を連れてパラダイスに行ったのですが、今度は一番上の層に連れていきました。それを見ていた牧師の魂が驚いて、「天の使いさん、チョットお聞きしたいのですが、これは何かの間違いではありませんか。実は、あの人はわたしの教会の信者ですから良く知っているのです。自分の名前も書けない無学な男なのですよ。それが一番上で、わたしが一番下ということは、どういうことなのでしょうか。」
　すると天使が答えて、「いや、間違いではありません。あなたは確かに良い説教をしました。しかし、時に、その説教の通りではない行動もしました。ところがあの人は、あなたに教えられた通りの生活を本当に一生懸命してきたのです。だから、あの人は一番上で、あなたは一番下なのです」。そのような幻の話です。
　わたしたちは、イエスさまの弟子となるために、毎日の祈りと信仰の訓練を必要としています。訓練をして弟子となることを学ばなければなりません。神の国に生きることを学ぶのです。それは、わたしたちが、どのような信仰に生きるか、どのような信仰の規律を持つかということでもあります。そして、その信仰に基づく生き方、信仰の規律というのは、毎日の生活と切り離されたものではありません。生活の中で実践されて行かなければならないものです。言い換えれば、毎日の生活の中で、この判断が、この行動が、その一つ一つが、主イエスさまに従う者の生き方か否か、それを問い続けること

です。
　イエスさまに従う道は、決して安易な道ではありません。今日の福音書は、大変厳しい決断を迫っています。イエスさまに従うことを、何よりも優先させることが求められています。しかし、厳しさだけが目の前にあるのではありません。わたしたちの前には、わたしたちに先だって、その道を切り開いて歩んで行ってくださるイエスさまがおられます。そのお恵みの中に、わたしたちは招かれているのです。
　峻厳なる神さまは、また慈愛に溢れた方であることを信じて、イエスさまの後に従っていく決意を新たにいたしましょう。